

が非常に少い折柄、洋務運動までにしろ、このような總括的な出版がなされたのは、喜ぶべきことで、一つの成果であることはいうまでもない。經濟史の入門書、概説書として適當である。

(北京、人民出版社、一九五八・六、本文四〇〇頁)

グラマン著

オランダのアジア貿易

一六二〇——一七四〇年

永積洋子

コペンハーゲン大學、歴史學講師、クリストフ・グラマン氏については、先に「オランダ東印度會社の日本銅貿易、一六四五——一七三六年」を紹介したが、(史學雜誌六十八—三)ここに取上げるのは、日本銅の他、八つの商品を扱い、地域も全アジアにわたる同氏の近著である。

本書は序文六頁、本文三三四頁から成り、各商品別の十二章の他、十二の附録と索引、書目、未刊文書目録、それに總計六十九に及ぶ各種の表がある。

一、序説。著者はオランダ東インド會社の複雑な、又獨自な機構を明らかにする。氏によれば、本書の年代を一六二〇年——一七四〇年と區切つたのは、この年代が、會社の發展過程のあらゆる段階、即ち(一)一六二〇年代(會社の東アジアに於ける版圖が大體きまつた時期)(二)十八世紀初期(東インド會社の活動の最盛期)(三)一七四〇年代(會社改革の要求が高まつた時代)をカ

バーしているからである。

會社は周知の通り、從來オランダの各地にあつた七つのカームを統一し、會社組織にしたもので、各カームの取締役の代表者から成る十七人會が、その中心となつて會社の經營に當つた。會社設立の際、これまでの各カームの取締役を會社が引き繼いだ。又空席がある場合、取締役の推薦した候補者の中から、その町の市長が新取締役を指名した。そこで取締役は、町の支配者層により占められることになつた。その後株主の不滿により、取締役の任期を三年としたり、或いは大株主の選舉により取締役を任命する等の改革も行われたが、結局取締役と町の支配層の結びつきは本質的に變りなかつた。

十七人會は毎年の派船の際、資本總額と各カームへの割當額を決定し、又主要な商品は、十七人會が一手に賣出した。一方各カームは船を機裝し、取締役はその割當額に對してだけ責任を持つた。このように見ると、會社はただカームの連合體のように考えられるかもしれない。しかし、カームを組織したのは、會社の成立の歴史的事情によるものであると共に、この組織が、商品を賣するのに最も便利であるという實際的な配慮によるものである。そして地方の利益と中央の統制は見事に結合され、そのために國力を結集することになつていたのである。例えば創設期の資本は、六千五百萬グルデンであるが、これはイギリス東インド會社の資本の十倍に當つている。又連邦議會は、特に戰時には會社に強力な干渉を行つてゐる。例えば第一次、第二次蘭英戰爭の

時、會社は多數の船舶、兵力、武器を政府に供給した。

會社設立の際、東インド貿易の獨占が二十一年の期限つきで許可されたが、この後契約の更新の度に、會社は政府に特許料を支拂つた。又戦時には、積荷に應じて會社の船の護衛費を政府に支拂つた。設立時の宣言は、誠實に貿易を行い、平和的に通商することを目的としたもので、軍隊や武器を持たず、要塞を築いたり、スペイン・ポルトガル船を拿捕したりする命令を受けていなかった。ただ一六一四年、クーンの總督就任以來、領土の占領と植民地の建設、他國船の拿捕を目的とするようになったが、この段階になつても、十七人會の方がバタビヤの總督、参事會より平和的であつた。

最後に、會社の貿易獨占を妨げる私貿易であるが、これはイギリスの場合に比べ、問題とするに足りない。むしろオランダ人、或いはオランダの資本が、スコットランド、フランス、デンマーク等の會社に参加する例が屢々見られる。従つて、北西ヨーロッパを一つの單位として見るならば、幾人かの大商人が並立していることになる。インドネシア・セイロン等の會社の強制栽培を見れば、「獨占」という體制は顯著であるが、しかし會社の貿易は、胡椒、香料のみを扱つたのではない。そこで、會社の貿易を考察するに當つて、獨占ということを誇張して考え過ぎぬ様注意せねばならない。

二、「オランダ」と云う會社。この章で著者は、商品各論に先立ち、會社の貿易についての總説を試みる。會社がヨーロッパに輸入した商品と、その割合を各商品につき概観し、又船積みの際

の技術的問題、ヨーロッパに歸着後の競賣、船の艦装の内容の分析等について述べる。

先ず著者は、北西ヨーロッパに戦争のなかつた四つの時期、即ち、(一)一六一九—一七〇〇年、(二)一六四八—一七〇〇年、(三)一六七八—一七〇〇年、(四)一六九八—一七〇〇年を取つて比較する。これによれば、十七世紀中期を境に、オランダがヨーロッパに輸入した商品の様相が變つてゐる。即ち十七世紀の前半には、①胡椒②香料③織物の順位だつたが、後半には④織物⑤香料⑥胡椒となる。更に十八世紀に入ると、コーヒー、紅茶の占める比重が大きくなり、胡椒は一層減少する。そこで十七世紀末から十八世紀始めにかけて、大きな變化があつたことが考えられる。輸入總額及びこれに伴う利益の急増、ヨーロッパ市場の變化、各商品の利益の變動などがそれである。

次に氏は、特殊な名稱の商品につき、くわしく解説する。又これらの商品を船に積む場合、種々な商品の積合せ方、船のバラスト等の技術的な問題につき二三の例をあげてゐる。更に東アジア貿易に特有な技術の問題は、船がオランダ出帆後歸國するまで一つまり商品の注文から實際の供給まで——に二年かかることであり、このことは殊に戦争等の場合に大きな影響を持つことをあげてゐる。

次に著者は、今まで知られていないアムステルダムでの競賣の様相につき記す。先ず十七世紀についてみると、胡椒、香料、生糸等は少數の有力商人から成る組合に獨占的に賣られており、こ

これらの大商人は十七人會と關係があつた。一六二〇・三〇年代には會社は予め協定された價格で商品を有力商人にのみ賣つてゐるが、この場合、或る一定期間中會社はこの商品を他に賣らないという條件がついてゐた。大體十七世紀には商品を最高入札者に賣るという例は少い。これに對し不滿な株主から批判がおこり、一六四二年に協定價格による販賣は廢止され、各カールから組織される委員が、競賣に立合うことになつた。十八世紀になると、競賣に参加する商人の數は殖え、取引は各商品に分れ、分業が進み、自由な競賣が行われるようになる。

次に氏は、船の艦裝費の内容を検討する。一七一四——二八八年のカール・アムステルダムの場合では、積荷が四三・三三%（金銀塊と貨幣が三八・九二%、商品が四・四一%）船の裝備が二二・八九%、船員の給料が二六・七九%、その他の雜費が六・九九%であつた。十七世紀の場合、運賃等諸經費の計算は不可能であるが、全體の傾向から云えば、十七世紀には十八世紀に比べて現金の占める割合が小さかつた。他方商品や船員の給料の占める比率には變化が見られない。

三、地金と貨幣。この章には貿易に使われた貨幣の變遷や、金銀の問題につき記す。會社設立の頃、東南アジアではメキシコ貨幣（レアル・ファン・アハテン）が最も廣く流通し、十七人會もアジアにはレアル・ファン・アハテンのみを送ることを命じた。一六二二年、アンボイナ、モルッカ、パンダ等で商品の仕入にはオランダの貨幣も使用する様命ぜられ、この後オランダ貨幣が次

第に各地に普及した。

金銀の地金の輸出は、十七世紀前半には厳しく禁止されてゐた。一六四七年、スペイン國王は、オランダが輸入金銀を再輸出するならば、金銀をオランダへ送ろうという條件を出したので、この輸入金銀の中三分の二を再輸出することが決定された。その後度々制度の變遷があり、十八世紀後半からは完全に自由となる。

他のヨーロッパ諸國と同様、オランダに於ても貿易により外國貨幣が流れ込むと、國內の貨幣が粗惡な外國貨幣に代る傾向があつた。そこで國內での標準貨幣を鑄造する試みが行われ、同時に、國內貨幣と貿易貨幣とを區別することとなる。この結果貿易貨幣は國內貨幣よりも低く評價され、パタビヤ——本社の決算に複雑な問題を生じた。即ちオランダから東洋への輸出品は、貨幣價値の相違のため、常に二〇——二五%の架空の利益を生ずることになるからである。

アジア市場から供給される貴金屬の主なもの、一六六八年までは日本の銀であり、これは或る時期にはオランダ本國から供給される銀を上廻つてゐる。その他は、マニラから得られるメキシコ銀、スマトラ、マラッカの金等であつた。一六五二——五三年では、オランダからの銀が一五九、一二二グルデンに對し、アジアからは三九四、六〇九グルデンであり、金はオランダからの輸出はなく、アジアからのみであつた。即ちこの例ではアジア市場が、金銀を自給自足出来ることを示している。しかし、この年は蘭英戰爭のためヨーロッパからの銀の供給が減つてゐるので、む

しる例外である。一六五七年からは、再びヨーロッパ金銀に對する需要が大きくなる。

さて、バタビヤから輸出された金銀の半分以上は、ベンガルとコロマンデルに向けられていた。ここでも最も重要なのは、日本の銀だったが、一六六八年以後は金に代つた。この後江戸幕府の金貨改鑄は、會社の貴金屬貿易に決定的な影響を與へ、十七世紀末から十八世紀にかけて、バタビヤはヨーロッパに貴金屬輸出の要求を送る。その他バタビヤ、ベンガル、コロマンデル、セイロン、マラバール、スラット等各地の貨幣の變遷も、會社の貿易に影響を與えた。

第四章以下は、各商品についての概説である、まず胡椒は、十七世紀には會社の最も重要な商品で、産地はアジア各地に廣く分布していた。オランダの他、中國、インド、イギリス、フランス、デンマーク等が取引に従事し、アジア各地で、仕入のための競争が激しかつた。次に香料は十七世紀の一時期には、完全に會社の獨占商品となつた點で注目に値する。即ち會社は香料諸島を完全に把握すると、丁子、肉豆蔻の生産を思いのままに統制し、生産過剩の時は間引きをする等の方法を取つた結果、非常に安い値段で仕入れ、ヨーロッパ市場では會社の定めた値段で賣ることが出來たのである。このため利益は屢々千パーセントを上廻ることがあつた。しかし丁子があまりにも高くなつたため、需要が次第に減つて來た。このような會社の政策に對し、單價を引下げても、大量に賣る方が有利であるという批判がおこつてゐる。

この他氏は、胡椒、香料につく需要のあつた生糸、香料の仕入に必要な織物類、バラスト商品としてヨーロッパへ輸入された砂糖、主要な商品の一つである日本銅、嗜好品として十八世紀に需要の急増した茶、コーヒーについて記している。

最後の章は利益と損失で、これは内容から云えば、第二章に續くもので、會社の經營全般に關するものである。氏は會社の簿記法について、二三の例をあげている。そして會社の不完全な簿記法を改め、バタビヤと本國との兩者を統一した決算簿を作らうとした、十七世紀末のヒュッデの試みについて述べる。しかし會社自身、貿易全體の收支について正確な判断を持たなかつたわけではない。常に利益の最低目標があり、それ以下の場合には、商品の注文が中止されていた。そこで著者によれば、會社の衰退の原因は、しばしば云われる會社自體の腐敗や、それに伴う行政管理の不備だけではなく、他のヨーロッパ諸國との競争を考えに入れなければならぬ。又ヨーロッパで最も需要のある商品が、綿や絹織物から、コーヒー・茶に變つて來た結果、單價から見た利益は少くなつた代り、多量を速かに輸送せねばならなくなつて來た。このような市場、及び貿易の性格の變化を、會社の衰亡の重要な原因だと考へてゐる。

以上の紹介に當つて、本書の中心と云うべき商品各論につき、殆ど何も記さなかつたことは、不審に思われるかも知れない。それは第一に、個々の商品の研究に當つては、研究者は本書の隨所にあげられてゐる數字を参照する必要があるためであり、第二に

は著者の關心が専らアジアの産物のヨーロッパへの輸入、ヨーロッパ内での需要の變遷に向けられていたからである。第二章で、會社の貿易を概観するに當つて、氏が四つの時期を選んだ理由は、北西ヨーロッパに戦争のなかつたことによるのであり、その期間の本國への歸り荷の分析を、會社の商業活動を理解する上の出發點としているが、このことは、この本の性格を決定的に特徴づけている。即ちこれはアジア商品のヨーロッパ流通史とでも云うべきものである。氏は各章において、「これらの商品の大半は、アジアにおいて消費された。」或いは「アジアの市場が、ヨーロッパ市場に優先して考えられた。」等と述べながら、そのアジア市場については、極めてわずかの分析しか行つていない。そうして各々の商品の需要、供給と、價格の變動を、専らヨーロッパ市場の問題として跡づけている。このため、各章はそれぞれ非常に興味のある商品を扱いつつながら、時に單調な感じをまぬがれない。これらの商品の主な舞臺であるアジア市場について、その需給關係、各國の競争、更に又異なる商品同志の關係など、今後の研究に残された問題はいろいろある。しかしオランダ東印度會社の貿易について、これまで概説書が殆どなかつた以上、本書の持つ意義は極めて大きい。隨所に収めてある各種の表だけでも、利用價值は無限で、會社の貿易史の研究者が必ず参照せねばならぬ本と云つてよからであらう。

(Glammann, Kristof: Dutch-Asiatic Trade 1620~1740. Copenhagen & The Hague, 1958. pp. XI & 334)

ローゼンタール著

中世イスラムの政治思想

嶋田襄平

イスラム學の重要な一部門をなすものでありながら、イスラム政治思想の本格的研究は、最近ようやく開始されたと言つてよい。まとまつた著書として、今まで有名なインドのムスリム、シエルワニーのそれ(1)しかなかつたこの分野に、最近ローゼンタールの新著を加えたことは、我われの非常な喜びである。著者にはこれまで、イブン・イルシュード、イブン・バーッジャ、イブン・ハルドゥーンおよびマイモニデースなど、ムスリムおよびユダヤ教徒の哲學思想と政治思想とに關する著書・論文があり、「中世イスラムの政治思想」というテーマを論ずる者としては、最も適任の人と言つてよいであらう。本書は、國家構成法とムスリムの歴史と題する第一部と、プラトンの遺産と名づける第二部とからなる。ギリシア哲學の遺産を繼承したファラーシイファ(ムスリムのギリシア哲學研究者)の國家論を第二部で論じ、その範疇に屬さない學者・文人・政治家の國家論を、すべて第一部に収めたものである。したがつて第一部は、そのまとめかたに必ずしも内的必然性はない。以下、簡単に本書の内容を紹介する。

第一章「幸福の探求」これは本書全體の序論である。「政治學の目的は幸福の達成にある」と述べたアリストテレスの言葉